

宋代における陂湖の利

——越州・明州・杭州を中心として——

小 野 寺 郁 夫

本題をとりあげた目的は、湖と人間生活の関係を明らかにすることにある。その内容は大別して、湖の利益とその利用という主として経済的問題と、利用者間の関係という社会的問題とになるであろう。果してどのような事象がとらえられるか知れないが、多面的に考察してみたい。関係する論文には次のようなものがある。

周藤吉之氏「宋元時代の佃戸に就いて」(史学雑誌四四ノ一〇・一一、一九三三年)

玉井是博氏「宋代水利田の一特異相」(京城帝国大学文学会論纂第七輯「史学論叢」、支那社会経済史研究所収、一九三八年)

佐藤武敏氏「宋代における湖水の分配——浙江省蕭山県湘湖を中心に——」(人文研究七ノ八、一九五六年)

吉岡義信氏「宋代の湖田」(鈴峰女子短大集報三、一九五六年)

周藤氏の論文は一部、湖田の小作関係に言及されて居り、玉井氏の論文はそれに基づいて、畝田・圩田・湖田・沙田・蘆場等を取上げ、それぞれの特色の相互比較を試みられたものである。本稿の資料は、この論文と重複するものが多い。佐藤氏の論文は越州蕭山県の湘湖をめぐる、国家、村落、豪民の社会関係を分析されたものである。吉岡氏の論文は残念ながら見るを得ない。ただ「宋代研究文献提要」によると、湖田盛行の跡を辿られたものようである。

一 湖とその機能

先ず、湖の地理的狀況或はその果した機能を検討することから始めたいと思う。それには第一に越州(紹興元年、紹

興府に改む）について述べ、順次に明州（紹熙五年、慶元府に改む）、杭州（建炎三年、臨安府に改む）に及んで行くことにする。

〔越州〕この州には鑑湖・夏蓋湖・湘湖等がある。鑑湖に関する資料には、曾鞏の元豊類藁卷一三に序越州鑑湖図、王十朋の梅溪王先生文集後集卷二七に鑑湖説上下、嘉泰會稽志卷一三に徐次鐸の復湖議等がある。この湖は鏡湖とも南湖ともいい、後漢順帝の永和五年、會稽太守の馬臻が創立したものである。その位置は、

南並山、北屬州城漕渠、東西距江。（曾鞏）

と称され、州城の、漕渠が通じている南にあり、更に湖の南は山に面し、東西には江を置いている。地勢からいうと、

凡水之出於東南者、皆委之。（曾鞏）

と、東南に発する水が流込むといい、また、

會稽山陰兩縣之形勢、大抵東南高西北低、其東南皆至山、而北抵於海。^西（徐次鐸）

と、會稽山陰兩県の形勢は、東南に高く山に至り、西北に低く海に伸びている。この兩県は越州の倚郭の県である。湖を下降しては、

所謂湖高於田丈餘、田又高海丈餘、（曾鞏）

と、湖―田―海、各々の高さの差が一丈余りあるということになっている。前出の東西の江とは、

隄之在會稽者、自五雲間東至於曹娥江、凡七十二里。在山陰者、自常門西至於小西江、一名錢清、凡四十五里。（徐次鐸）

といわれ、東は曹娥江、西は小西江、またの名を錢清江ということが知られる。因みに読史方輿紀要卷九二紹興府によると、錢清江は、蕭山県では浦陽江とも東小江とも呼び、上流の諸暨県では浣江と呼ぶ。湖の大きさは、府城の周圍二十四里余りというのに対して、三百十里（通典）あるいは三百五十八里（曾鞏）ある。

湖水の流出に当っては、

夫斗門堰閘陰溝之爲泄水、均也。然泄水最多者曰斗門、其次曰諸堰、若諸陰溝、則又次焉。（徐次鐸）

といわれ、排水量の多いものの順に、斗門・堰・陰溝があげられる。斗門には、曾鞏の記すところによると、

州之西三十里、曰柯山斗門、通民田。：其東曰曹娥斗門、曰葉口斗門、水之循南隄而東者、由之以入于東江。其西曰広陵斗門、曰新逕斗門、水之循北隄而西者、由之以入于西江。其北曰朱儲斗門、去湖最遠。蓋因三江之上、兩山之間、疏爲二門、而以時視田中之水、小溢則縱其一、大溢則盡縱之、使入于三江之口。

といい、東に曹娥・葉口の二斗門あつて曹娥江と通じ、北に周つて湖から最遠の地に朱儲斗門があり、西に向うと州城から三十里の地に柯山斗門、更に西には広陵・新逕の二斗門があつて錢清江と通ずる。東西に二斗門を設置したのは、大溢に備えてのことである。陰溝等については、

州之東、自城至于東江、其北隄石撻二陰溝十有九通民田。：州之東六十里、自東城至于東江、其南隄陰溝十有四通民田。(曾鞏)と見え、東部の北隄に石撻二陰溝十九、南隄には陰溝十四があつて、それぞれ民田と通じている。これを徐次鐸によると、

今兩湖之爲斗門堰開陰溝之類、不可殫舉。姑以其著者言之、其在會稽者爲斗門凡四所、一日瓜山斗門、二曰少微斗門、三曰曹娥斗門、四曰蒿口斗門。爲開者凡四所、一日都泗門開、二曰東郭開、三曰三橋開、四曰小凌橋開。爲堰者凡十有五所、在城內者有二、一日都泗堰、二曰東郭堰、在官塘者十有三、一日石堰、二曰大埭堰、三曰皐步堰、四曰樊江堰、五曰正平堰、六曰茹洋堰、七日陶家堰、八曰夏家堰、九曰王家堰、十日彭家堰、十有一曰曹娥堰、十有二曰許家堰、十有三曰樊家堰。其在山陰者爲斗門凡有三所、一日廣陵斗門、二曰新逕斗門、三曰西墟斗門。爲開者凡三所、一日白樓開、二曰三山開、三曰柯山開。爲堰者凡十有三所、一日陶家堰、二曰南堰、皆在城內、三曰白樓堰、四曰中堰、五曰石堰、六曰胡桑堰、七日沉壩堰、八曰蔡家堰、九曰葉家堰、十日新堰、十有一曰童家堰、十有二曰寶舍堰、十有三曰抱姑堰、皆在官塘。兩縣之北、又有玉山斗門八間、曾南豐所謂朱儲斗門是也。去湖最遠、去海最近、地勢斗下、泄水最速。其三間隸會稽、五間隸山陰。若其他民各於田首就掘隄、增爲諸小溝泊古諸暗溝及他飲穴之處、難徧以疏舉、大抵皆走泄湖水處也。

ということになって、斗門八所、開七所、堰二十八所を数える。その他小さいものまで入れると枚挙にいとまがない

という。兩湖とは、会稽縣に属する部分を東湖、山陰縣のそれを西湖というためである。

漕渠は湖に対してどのような位置にあるかという点、東部では、

州之東、自城至于東江、其北隄石埭二陰溝十有九通民田。田之南屬漕渠、北東面屬江者、皆溉之。州之東六十里、自東城至于東江、其南隄陰溝十有四通民田。田之北抵漕渠、南並山、西並隄、東屬江者、皆溉之。（曾鞏）

と、漕渠が田を南北に断切つて東し、曹娥江に流込んでゐる。恐らく先の曹娥斗門と葦口斗門とはここに置かれてゐるのである。また西部では、

州之西三十里、曰柯山斗門、通民田。田之東並城、南並隄、北濱漕渠、西屬江者、皆溉之。（曾鞏）

と、漕渠は湖を北に抜けて西流してゐる。これも朱儲斗門附近から出てゐることになる。このように見てくると、漕渠は湖を西北と東南の線上に貫流してゐるといえる。湖内を通つてゐた証左としては、

至於治平之間、盜湖爲田者、凡八千餘戶、爲田七百餘頃、而湖廢幾盡矣。其僅存者、東爲漕渠、自州至東城六六里、南通若耶溪、自樵風涇至於桐鳴十里、皆水広不能十餘丈（曾鞏）

と、湖田が出現し、治平年間には東方に漕渠として州城から東城に至る三十六里、南方には別に十里の間が残つてゐるだけであるということによつて知られよう。

さて、湖はどのような機能をもつてゐるかという点に移ろう。これまでのところで大体察知されように、第一に灌漑用の貯水池になつてゐる。灌漑面積は古來九千余頃と伝えられるが、

摠之溉山陰會稽兩縣十四鄉之田九千頃、非湖能溉田九千頃而已、蓋田之至江者、盡於九千頃也。（曾鞏）

と、東西の江に限られた部分が九千頃なのだという。とにかく会稽山陰兩県の十四郷に及んでゐる。その戸数は数万家といわれる（徐次鐸）。この貯水は同時に漕渠の用水となる。宋会要輯稿の食貨七水利、嘉祐五年七月六日の条に、

羅拯言、：却致湖塘漸成湮廢、有妨灌漑民田、并運河因茲淺澁、阻滯官司舟船。

とあつて、湖水が減少して運河が浅くなると、当然船の航行に支障をもたらす。また

紹熙五年冬、孝宗皇帝靈駕之行、府縣懼漕河淺涸、盡塞諸斗門、固護諸堰閘、雖當霜降水涸之時、不雨者踰月、而湖水僅減二二寸、湖田被浸者久之。（徐次鐸）

といい、孝宗が行幸しようとした時、地方官庁では未然に漏水を防いで湖面に水をたたえ、霜降の渇水期にも殆んど水位に変わらなかったという。

また貯水ができる、水災を防止するのに役立つ。所謂防災ダムの用である。王十朋によると、

鑑湖三百五十八里之中、蓄諸山三十六源之水、歲雖大澇、而水不能病越者、以湖能受之也。今湖廢而爲田、三十六源之水、無吞納之地。萬一遇積雨浸淫、平原出水、洪流滔天之歲、湖不能納、水無所歸、則必有漂廬舍敗城郭魚人民之患。嘗聞、紹興十有八年越大水、五雲門都泗堰、水高一丈、城之不壞者幸也。假令他日湖廢不止於今、而大水甚於往歲、則其爲害當如何。

と、南方諸山三十六源の水が大澇の歳にも越州の災いにならないのは鑑湖がそれを受容するからである。それなのに湖田が今より増加し、万一大水でも見舞うとすれば、その被害はいかばかりかと憂慮している。

また湖には魚がすみ水草が育つ。

使湖果復旧、水常瀾滿、則魚鼈鰕蟹之類、不可勝食、菱荷淺茨之實、不可勝用。（徐次鐸）

とあって、うを・すっぽん・えび・かにの類を産し、まこも・はす・ひし・おにはすの実が食用に供される。

これらの外には湖田がある。因みに陳襄の夏蓋湖議（嘉泰会稽志卷一〇）によると、

襄得之父老云、本州之湖、其自然可以爲田者、唯有鑑湖。高仰去處、蓋不失水利、兼與民田、亦無相妨。

と、鑑湖は他の湖と異って高仰の地にあるため、水利上それほど支障が起らず、自然に湖田となる要素を備えているという。湖田の問題は別に章を設けて取上げようと思う。

次には湘湖である。この湖は蕭山県の西二里にあり、周囲八十里である。佐藤氏によると、多雨の際の水の処理と灌漑、この二つの目的のために、政和二年に築造されたものである。嘉泰会稽志卷一〇湖の条に

溉田數千頃、湖生蓴絲最美、水利所及者九鄉。

とあって、灌漑面積数千頃で九郷に及ぶ。また美味のじゅんさいも産する。また湖田も出現し、遂將湘湖填築爲田、侵漁不已。(宋会要輯稿の食貨六一賜田雜錄、乾道四年十月二十六日の条)

と、盛んに填築が見られる。

夏蓋湖は上虞県の西南四十里にあり、周圍百五里である。嘉泰会稽志卷一〇湖の条に、

夏蓋湖在縣西南四十里、湖内三十六溝、其岸北二斗門、依山有神祠、湖東北則夏蓋山也。

と、湖の東北に夏蓋山があり、湖内には溝三十六、北岸に斗門二がある。勿論灌漑に用いられ、同書卷一〇に載せる陳豪の夏蓋湖議に、

上虞餘姚所管陂湖三十餘所、而夏蓋湖最大、周圍一百五里、自來蔭注上虞縣新興等五郷及餘姚縣蘭風郷。此六郷皆瀕海、土平而水易洩。田以畝計、無慮數十萬、惟藉一湖灌漑之利……………

係上虞餘姚兩縣六郷二萬餘戶植利、所繫非輕。

といい、海岸に間近い上虞県の新興等五郷と余姚県の蘭風郷、この六郷、面積にして数十万畝(＝数千頃)、戸数にして二万余に及ぶ。この湖でも湖田が出現する。

〔明州〕鄞県には、西に広徳湖、東に東銭湖がある。広徳湖に関する記載は、曾鞏の元豊類藁卷一九に広徳湖記、乾道四明図経卷二に王廷秀の水利説、その他がある。そもそも鄞県では、

江在縣東一里、實海口也。而有大淡小淡之名、蓋隨地而異也。乘潮往來、南入於奉化界、東入於定海昌國、西入慈溪。(乾道四

明図経卷二水)

奉化江南來亘其東、慈溪江西來亘其北、會而入海、率隨潮上下。(宝慶四明志卷一二鄞縣志水)

と、南から奉化江、西から慈溪江が流れ来たり、県の東一里で合流して海に注ぐ。広徳湖は以前鰲脰湖といい、県城の西十二里に位置し、周圍五十里(曾鞏)とも百里(王廷秀)ともいう。その水源は、

其水源出於四明山、而引其北爲漕渠、泄其東北入江。(曾鞏)

と、四明山に發し、湖から流出するには、北に引水して漕渠となり、東北に泄らして江に入る。江に入るまでには、城之河渠、蓋一水自它山經仲夏而入南門、一水自大雷經広徳湖而入西門。淫潦汎溢、則城之東北隅有礮、以洩於江、礮閘猶存。二水入城爲州民之利、今猶昔也。(乾道四明図經卷一水利)

と、四明山の支脈である大雷山に發し広徳湖を經由した水は、西門から入り、東北隅の礮閘を通るのである。

湖では、

周以隄塘、植榆柳以爲固、四面爲斗門礮閘。(王廷秀)

と、周りの隄塘には榆柳を植えて保強し、四面に斗門・礮閘を作つて排水する。すでに熙寧の初めに、

鄞人累石陸水、闕其間而肩以木、視水之小大而閑縱之、謂之礮。於是又爲之、益舊捨爲礮九、爲埭二十。隄之上植榆柳、益舊捨爲三萬一百。(曾鞏)

と、礮九埭二十、榆柳三万一百を数える。

この湖の利益について、舒亶は次の四つをあげる。

是湖千頃有四利焉。當春夏秋、四明諸山、積水東注、浩蕩汎濫、有如海潮、居人廬舍、往往淹沒、不一二日輒下、以是湖納之、一利也。方其旱歲、七鄉之田、引以灌溉、而漕河北取、以濟公私往來之舟、二利也。菰蒲鳧魚、四時不絕、凡村落城市之民、無田以耕、無錢以商者、莫不仰食於此、三利也。歉歲窮民、以尊根爲聖米、蓋自別邑他州爭取而食者、不可勝數、四利也。(乾道四明図經卷一〇、舒亶の水利記)

即ち春夏秋に四明諸山から短時間に流出する水を受止める、これが第一の利である。日照りの年に鄞県十四郷中西の七郷の田を灌溉し、北に接続する漕河に水を供給し、公私往來の舟を通す、これが第二の利である。まこも・がま・あひる・うおが一年中絶えず、田なく錢もない貧民の生活の資になる、これが第三の利である。飢饉の年に窮民がじゅんさいの根を食用にし、他の地方からも沢山の人が集まってくる、これが第四の利である。これを多少補うと、宋会要輯稿の食貨七水利、紹興九年五月二十四日の条に、

今所収不及前日之半、以失湖水灌溉之利故也。計七郷之田、不下二千頃、所失穀無慮五六十萬碩、…と、灌溉面積二千頃以上、穀の收穫量五六十万石以上になる。また、

湖之産、有鳧雁魚鰲菱蒲葭蓼蓼蓼蓮茨之饒。(曾鞏)

とあり、あひる・かり・うお・すっぽん・まこも・がま・よし・おぎ・あおい・じゅんさい・はす・はまびし等を産する。その他湖田も例にもれず見られる。

東錢湖は単に錢湖あるいは万金湖、唐代においては鄞県の治所の西にあつたので西湖と呼ばれる。県城の東三十里にあり、その大きさは周圍八十里にして面積八百頃という。宋会要輯稿の食貨八水利、乾道五年九月六日の条によると、

環湖皆出、倚山爲岸、岸非山處、殆不能半。

と、湖岸の半分強までが山に取囲まれている。排水には、同条に、

中有四閘七堰。

と、四閘七堰が施設されている。七堰とは錢堰・大堰・莫枝堰・高湫堰・栗木堰・平湖堰・梅湖堰を指す（乾道四明図經卷二水）。

この湖はやはり灌溉に用いられる。同条に、

凡遇旱涸、開閘放水、灌溉七郷民田、計五十四萬畝。雖甚亢旱、亦無災傷。

と、東部七郷の民田五十四萬畝（＝五千四百頃）にわたる。一つに三十余萬畝（＝三千余頃）ともいわれる（同書食貨六一水利田、淳熙十二年正月五日の条）。また水草の栽培にも用いられる。同条に、

豪民於湖塘淺岸、漸次包占、種植菱荷。菱、菱。

と、湖塘の淺岸でまこも・はすが種植され、

自前雖時復野生菱草、諸郷百姓、至三三月間、便採割貨賣、飼食耕牛。

と、野生するまこもを、諸郷の人々が二三月の頃になると刈取って売りに出したり、耕牛を放って食ませたりする。

その他湖田も見られる。

鳳浦湖と沈審湖とは定海県にある。前者は県の北七十里、後者は北一百里、兩者合わせて二万六千余畝（二百六十余頃）を灌漑できるというが、湖田化も見られる。

〔杭州〕ここには西湖がある。西湖に関する記載は、白居易の白氏長慶集卷五九に錢唐湖石函記、蘇軾の奏議集卷七に乞開杭州西湖状と申三省起請開湖六条状、吳自牧の夢梁錄卷一二西湖の条にある。その他殊に南宋になると、宋会要輯稿によく現われる。さて、杭州城は東西に狭く南北に長い。その北部は江南運河の終点である。宋史卷九七河渠志に

湖西運河、自臨安府北郭務至鎮江口陂、六百四十一里。

とあり、臨安府の北郭務即ち北郭稅務が運河の終点である。その南に、州城と西湖が東西に直接して並んで居り、更に州城の東南には、東北に錢塘江が流れている。西湖は錢塘湖あるいは上湖とも呼び、周圍三十里ある。白居易によると、

北有石函、南有寛。

といい、北部に石函、南部に寛があつて湖水が流出する。また蘇軾によると、

今西湖水貫城以入于清湖河者、大小凡五道一暗門外斜門一所、一湧金門外水閘一所、一集賢亭前、皆自清湖河而下、以北出餘杭門、不復與城中運河相灌輸。

といい、斗門二、水閘二、水寛一をあげる。そしてそこを通つて城内の清湖河に集まる水は、それ以上深く入らずに北の余杭門から出てしまう。大体水勢は、海水が南から北に向つて流れ、途中西湖の水と合流して運河に集まる。湖水は様々に利用される。第一に灌漑用である。白居易によると、

凡放水溉田、每減一寸、可溉十五餘頃、每一復時、可溉五十餘頃。…若隄防如法、蓄洩及時、即瀕湖千餘頃田、無凶年矣。

と、順調に運営されれば、その面積が千余頃に及ぶというが、蘇軾は、

今雖不及千頃、而下湖數十里間、菱菱穀米、所獲不貲。

と、千頃に及ばなくても、下湖に至る数十里の間が恩恵に与るといふ。次には運河の用水としてである。即ち、

西湖深闊、則運河可以取足於湖水。若湖水不足、則必取足於江潮。潮之所過、泥沙渾濁、一石五斗。不出三歲、輒調兵夫十餘萬功開浚。而河行市井中、蓋十餘里、吏卒搔擾、泥水狼籍、爲居民莫大之患。（蘇軾）

と、城内の運河用に、錢塘江の水は一石に五斗の泥沙を運んでくるので、是非とも西湖の水を使用すべきであるといふ。

また日常の生活とも深い関係がある。中でも杭州の城中は鹵地多く甘井なしといわれ（蘇軾）、飲料水として重要である。宋会要輯稿の方域一七水利、紹興二年四月十六日の条にも、

臨安府城中、惟籍湖水喫用。

と、城中皆な湖水を飲用している。白居易によると、

其郭中六井、李泌相公典郡日所作、甚利於人。與湖相通、中有陰竇、往往壅塞。亦宜數察而通理之、則雖大旱、而井水常足。

と、すでに唐代において李泌が六井を作り、陰竇を使って湖水を導いている。宋代に入ってから蘇軾あるいは湯鵬舉などもその補修を行っている。このことから更に酒の醸造用に当てられる。即ち、

天下酒官之盛、未有如杭者也。歲課二十餘萬緡、而水泉之用、仰給於湖。若湖漸淺狹、水不應溝、則當勞人、遠取山泉、歲不下二十萬功。（蘇軾）

と、年間二十余万緡の利益を集める本になって居り、湖水が使えないと、遠方から山泉を運ばないといけない。とにかく飲用されるのであるから汚染は回避されるべきであるが、後に見るように由々しき事態を惹起している。

次に菱藕等の栽培がある。蘇軾によると、

自來西湖水面、不許人租佃。惟菱葑之地、方許請賃種植。

といい、西湖では租佃が原則として認められないが、ただまこもが叢生している地に限ってそれが認められる。まこ

もは、蘇軾が引用する錢塘県尉許敦仁の言に、

西湖水淺、菱葑壯猛。

とあるように、湖がいよいよ浅くなる原因となるものである。続いて、

竊見、吳人種菱、每歲之春、芟除湧澮、寸草不遺、然後下種。若將葑田、變爲菱蕩、永無菱草壅塞之患。

とあって、菱の方は毎春根こそぎに掃除した上で播種されるので、まこものように湖を埋めてしまうことがないという。

湖田は、白居易が、

湖中有無稅田約十數頃。湖淺則田出、湖深則田沒。

といい、当時無稅の田が十數頃あった。宋代では菱藕の栽培が行われる程度であり、湖田は出現していない。その外、西湖が景勝の地として有名であったことはいうまでもない。

隣県の余杭県には南湖北湖がある。宋会要輯稿の食貨六一水利、紹熙五年九月二十七日の条に、

餘杭縣去行在四十五里、地勢最低、當天目群水之衝。

とあって、余杭県は地勢が低く、西方の天目山から流出する水が召溪となつてここを通過する。この湖は、同条に、

潦則潯水、旱則灌田、以爲三州六縣之利。

と、その水を量に応じて貯えたり放出したり、即ち灌漑用貯水池と防災ダムとしての機能をもち、杭湖秀三州六縣の利益になる。同条に、

每遇霖雨、水勢暴漲、即高尋丈。故隄防之設、比他邑爲重。不幸一決、則邑不可居、田不可耕、其害浸溢。

と、大雨の後には水量が増大するので、隄防が他県に比べて特に堅固でなければならない。

その他、同条に、

湖有蘆葦菱茨ホトケ鰯魚之利。

と、あし・よし・ひし・おにばす・うずら・うお等も取れる。なお湖田の記録は見当らない。

以上、越州明州杭州一帯の湖を取上げて検討してみると、(一)灌漑用の貯水池、(二)運河用水の供給、(三)飲料水並びに醸造用水の供給、(四)魚鳥の棲息、(五)水草の繁殖、(六)田地等々、日常生活に密切する多種多様の不可欠の機能をもっていることが明らかになったと思われる。ただし、すべての湖がこれらの機能を十分に果すのではない。その地域によって異なることはいうまでもなく、通じてみても互に相関関係をもっていて、甲が優先すれば、乙丙は犠牲を免れない。就中、田地化が進行して灌漑に支障を来すことなど、その典型的な例である。次に章を改めて、その変動力となる田地化の問題と、もう一つ水草による填塞の問題とを取上げよう。

二 湖 田 と 水 草

湖田は宋代以前においても見出される。例えば宋書卷五四孔靖（字季恭）伝に、その子孔靈符が、

山陰縣土境編狹、民多田少。靈符表徙無資之家於餘姚鄞三縣界、墾起湖田。

と、山陰県は人口多く田土が少いので、資産のないものを余姚・鄞・鄞の三県に移動させて湖田を起させたとある。また唐代では、前に出てきたように西湖に無税の田十数頃があったことを白居易が伝えている。広徳湖では、曾鞏が大中元年、民或上書、請廢湖爲田。任事者左右之。爲出御史李後素驗視。後素不爲據。民以得罪、而湖卒不廢。といい、実現しなかったけれども湖の田地化が主張されている。

宋代に入ると、玉井氏が述べられたところであるが、鑑湖では、曾鞏が、

宋興、民始有盜湖爲田者。祥符之間、二十七戶。慶曆之間、二戸爲田^四頃。當是時、三司轉運司猶下書、切貴州縣、使復田爲湖。然自此吏益慢法、而奸民浸起。至於治平之間、盜湖爲田者、凡八千餘戶、爲田七百餘頃、而湖廢幾盡矣。

といい、宋代に入ってから初めて湖田が出現し、大中祥符年間に二十七戸、慶曆年間に二戸、治平年間には八千餘戸、七百余頃に及び、湖が殆んど廢滅している。また広徳湖では、宋初淳化二年の頃に湖田が出来て居り、咸平年間には官

吏に職田として湖の西部の土地百頃が与えられるのを契機として、その田地が拡張する。天聖景祐年間には、湖田を申請する者が現われたが、張大有によつて却下されている（以上曾鞏）。その後元祐年間に起つた廢湖の説も舒亶の痛詰を受け、また龔囊の同様の説も蔡京に拒まれていた（王廷秀）。

以上の如く、いろいろ論議があるにせよ湖田化はよく見られるところである。湖田を耕作する場合には、予め官庁に許可を求め、次のように租税を納入する。宋会要輯稿の食貨七水利、皇祐元年正月二十五日の条に、

兩浙轉運司言、知越州餘姚縣謝景初申、當縣陂湖三十一所、並係衆戶植利蔭田。内二十一所、見于圖經。其間有被形勢豪強人戶請射作田納租課後來、遂廢水利去處。

と、越州余姚県の三十一ヶ所の陂湖では、形勢豪強の人戸が希望する土地に指定を受けて（＝請射）耕作を行い、租課を納入している。同様のことが、嘉祐五年七月六日の条に、

羅拯言、昨差往兩浙路、相度均定茶租。窃見、諸處係官湖廣并運河邊田土、多被權要之家請射、及隣近鄉民侵占汚澱、種作成田、或量出租課入官。其寔微薄、却致湖塘漸成湮廢、有妨灌溉民田、并運河因茲淺澱、阻滯官司舟船。如越州鑑湖、近歲爲貪黷之輩、以權勢干請、假託姓名、占射殆遍。

と、官有の湖塘とか運河近くの土地とかを、權要の家が請射し隣近の郷民が侵占して田地にして居り、その際状況に應じて租課を納入している。ただし湖田の進出は必然的に湖の湮廢を招き、灌溉の妨げになり運河の浅澱を惹起している。これらのことは越州の鑑湖で典型的に見られるという。政和元年十月二日の条には、

臣僚言、蘇湖秀三州、並江積水、歲爲患。故須圩岸以障。越州有鑑湖租三十萬、法許與修水利支用。乞令本路提舉常平司、委三州令佐、相視創立圩岸、工用之費、取足於鑑湖錢糧。從之。

と、蘇湖秀三州の圩岸を修築する工事に、鑑湖の租、三十万の錢糧が用いられている。このことは、政和六年十月六日の条にも、

新差權發遣提舉兩浙路常平等事趙霖言、奉詔相度、平江府積水、合用錢米、踏逐到越州鑑湖封樁米、欲乞支撥一十萬石、并借

支本路諸州常平本錢一十萬貫文。：詔、並依所奏施行。

と、同様の工事に鑑湖の封樁米が支給されている。何れも湖田から上納される租であつて、鑑湖など特に嘉祐治平の頃に湖の廢滅が伝えられて以来、湖田がどんなに一般化したかが知られよう。

しかしながら湖田が進行すると灌漑や漕運の妨げとなるので、国家権力の全面的な容認を受けているのではない。それどころか逆に厳しく取締られているのである。それは租課を納入していても盗とか侵とかいわれ、不法行為と見做されて居り、あるいは湖田を申請して却下されていることから明らかである。いま暫く湖に対してどのように対策を立てているのかを具体的に検討してみたい。曾鞏の広徳湖記によると、

至道二年、知州事丘崇元、躬按治之、而湖始復。轉運使言其事。詔禁民敢田者。至其後遂著之於一州敕。

と、至道二年に知州事の丘崇元が湖の回復をはかり、ついで特に明州一州の敕に著してその湖田を禁止している。また、

天禧二年、知州事李夷庚、始正湖界、起隄十有八里、以限之。湖之濱有地、曰林村砂末、曰高橋臘臺、而其中有山、曰白鶴、曰望春。自太平興國以來、民冒取之。夷庚又命禁絕、而湖始復。

と、天禧二年にも知州事の李夷庚が十八里の隄防を築いて湖の範圍を定め、あるいは湖浜の地である林村砂末と高橋臘臺の侵害を絶ち湖の回復に努力している。また、

康定某年、縣主簿曾公望、又益治湖。

と、康定年間に主簿の曾公望が修治を行い、また、

至張侯之爲鄆、則湖久不治、而七鄉之農以旱告。張侯爲出營度民田、湖旁者皆喜、願致其力。張侯計工賦材、擇民之爲人信服有知計者、使督役而自主之、一不以屬吏人、以不擾而咸勤趨。於是築環湖之隄、凡九千一百三十四丈、其廣一丈八尺、而其高八尺、廣倍於舊、而高倍於舊三之二。鄆人累石墜水、闕其間而屬以木、視水之小大而開縱之、謂之陂。於是又爲之、益舊爲陂九、爲埭二十、隄之上植榆柳、益舊爲三萬一百。：熙寧元年十一月始役、而以明年二月卒事。

とあり、張侯、後に名は岫とある人物が、熙寧の初めに、旱害を防止するため民を督役して幅高さともに旧に倍する隄防を増築する。更に礮・堦を増設し、隄防の保強に榆柳を植えている。その成果はとみにあがり、旱害なく、舟が通じ、水産物等も増加したという。また統資治通鑑長編卷九〇、天禧元年六月己卯の条に、

詔、明州城外濠池及慈溪鄞縣陂湖、所納課額、永除放之、許民溉田、疇采菱芡。從本州之請也。

とある。この課額とは湖田から上納される一定の租を指すのに相違なく、至道二年の湖田禁止に関する一州の敕も何時の間にか有耶無耶になっていた。がこの時明州城外の濠池と慈溪鄞両県の陂湖において再び湖田が禁止され、その課額が免除される。そして灌漑並びにひし・おにばすの栽培が行われることになるのである。また宋会要輯稿の食貨八水利、隆興元年十一月二十四日の条には、

知紹興府吳芾言、…熙寧間盜^み而田者、九百餘頃。朝廷嘗委前廬州觀察推官江衍、經度其宜、凡爲田者兩存之、乃立石碑爲界、內者爲田、外者爲湖、申嚴約束。

と、熙寧年間に湖田が九百余頃に及んだ鑑湖において、江衍が実際の趨勢に応じた施策を立て、石碑で区劃して内側を田、外側を湖としている。

このように時に官僚が灌漑の重要性を主張し、隄防の修築も行うが、ともすれば無視されて湖田が出現する。国家権力が常時灌漑政策を遂行し、その努力を続けるのでないと、一切は烏有に帰して、湖田が拡大するのである。それほどに一般の湖田に対する執着には根強いものがあるともいえる。民衆の側には、前出の資料に見るように租税を納入しさえすれば合法性を獲得できるという主張が存在し、時に公認される場合も生ずる。次にそのような一時期が到来する。

宋史卷三五四楼异伝に、

政和末知隨州入辭、請於明州置高麗一司、擬百舟應使者之須、以遵元豐舊制。州有廣德湖、壅而爲田、收其租、可以給用。徽宗納其說、改知明州、賜金葉、出內帑緡錢六萬爲造舟費。治湖田七百二十頃、歲得穀三萬六千、加直龍圖閣祕閣修撰、至徽猷閣待

制。郡資湖水灌溉、爲利甚廣。往者爲民包侵、异令盡泄之墾田。自是苦旱、鄉人怨之。在郡五年。

とあり、政和の末に棲昇が明州において高麗の使節を迎える諸費用を賄うため広徳湖に湖田を開く。その面積七百二十頃、一年に三万六千（石）の上納を得たという。勿論灌溉には大きな妨げになる。これより湖田政策が繰上げられ、知越州の王仲疑も加わって、明越二州の全域に及ぶ。そしてその租米も一般の税とは別に皇室財政を充すのに当てられる。湖田が及んだ範囲は、玉井氏があげられた鑑湖白馬湖竹溪湖広徳湖夏蓋湖等十三に限らず、陳鑿の夏蓋湖議に、

上虞陂湖之爲田者、共二十四所、共管納租米四千餘石。其西溪湖等十三所、共納二千餘石、而夏蓋湖、獨管納二千餘石。とあり、上虞県にだけでも十四を数える。

湖田の実施に際しては、越州で、

租湖田人、有願種者、亦有不願者、往往相半。蓋王仲疑、多抑勒等第、人租佃、或插種不及、即空納租課、如此之類、皆不願者。緣湖田不罷、不敢推還、官中年年以爲患、亦有請數畝爲名、而侵佔蔓延、至百十畝、如此之類、皆願種者。此湖之所以盡爲田也。（陳鑿）

とあって、耕作を願う者と願わない者が相半ばしたが、王仲疑が戸等に應じて割付けし、租課だけは嚴格に取立てる。その中で願う者は、逆に返還を求めても応じようとせず、定まった面積より拡大して行く傾向にある。鑑湖では、江衍が立てた石碑の外に百六十五頃余の田地ができて、湖は消滅に近い状態を呈する（宋会要輯稿の食貨八水利、隆興元年十一月二十四日の条）。広徳湖では、棲昇によって七百二十頃の田ができたが、また租額の異なる上中下三等の五百七十五頃九十九畝の外、湖澤として貯水できる低田、菱を栽培できる深葑地、その他多少の田地となしうる部分とから成っているともいう（同書食貨六三農田雜錄、紹興二年七月十七日の条）。夏蓋湖では、

佃戸占請之初、各有畝數、不敢侵冒。當時湖之爲田者、幾十二三、佃戸止於高仰處作塋、未敢涸湖以自便、民田尚被其利。但瀆水不如曩日之多。故諸鄉之田、歲歲有旱處。比年以來、冒佔不已、今則湖盡爲田矣。（陳鑿）

と、当初は各人の割当てられた枠内に止まって居り、湖の十分の二か三、それも高仰の地で為されるため、貯水も可

能であつた。が次第に田地が全域に波及して行く。陳橐は宋史卷三八八に伝があり、紹興十二年、六十六歳で死去している。ここで当時の租米額を整理しておくと、先ず越州全体では、「似聞鑑湖所入居一郡湖田課額之半」（陳橐）といわれ、鑑湖の額の二倍を占める。鑑湖については、六万余石（王十朋）とも五万余石（徐次鐸）ともいう。そうすると十万余石から十二万余石ということになるが、嘉泰会稽志卷五賦税の条には、

湖田米六萬六千三百七十四升三合一勺

會稽二萬六千二百六十四石五升

山陰三萬二千六百八十九石五升三合一勺

諸暨四千二百一十石三斗二升

蕭山二千八百四十石三斗二升

と減少している。これは後に触れるような事情によつて上虞余姚等の県が入っていないためもある。上虞県では、宣和元年から建炎四年までに三万三千余石を得たという（建炎以来繫年要録卷五〇、紹興元年十二月丁卯の条）。十二年で割ると二千七百五十余石となる。また数千石（宋会要輯稿食貨七水利、紹興三年三月二十九日）とも四千余石（陳橐）ともいう。この県にある夏蓋湖は、靖康元年と建炎元年の二年間に五千四百余石、即ち一年で二千七百余石（陳橐）とある。

明州では、糙米四万六千二百七石六升五合四勺（宝慶四明志卷六湖田の条）を得たとある。その広徳湖では、二万石（王廷秀）とも一万八千四百三十一石六斗八升（宋会要輯稿食貨六三農田雜録、紹興二年七月十七日の条）とも、あるいは一万九千余石が紹興七年に特に後で述べる事情によつて四万五千余石になる（同書食貨七水利、紹興九年五月二十四日の条）。以上明越州の湖田の租を總計すると、十数万石になるといえる。

湖田政策はすでに存在していた湖田を逆に国家権力が利用しようとしたものである。そのため急激に拡大する面があつたことが当然想定されるが、しかしその弊害もまたよく承知されているところで、間もなく湖田の廃止が説かれる。

建炎以後、湖租盡入戸部。(宋会要輯稿の食貨七水利、紹興三年三月二十九日の条)

とあって、南宋に入ってから租米が戸部のものになるが、問題は湖田である。先ず上虞余姚兩県で水の供給が十分でなく、湖田外の民田の減免額を湖田の租米で補っても四千二百余石の赤字になり、民間にはまたそれに数倍する損害が生じている事情によって、この兩県の湖田が紹興三年正月以降廢止される(宋会要輯稿の食貨七水利、紹興三年五月十日の条)。その後、明州の広徳湖で、

權發遣明州周綱言、嘗考、明州城西十二里、有湖名廣徳。：乞還舊物、仍舊爲湖。伏望特賜指揮施行。詔依、令轉運司疾速措置、申尚書省。(宋会要輯稿の食貨七水利、紹興九年五月二十四日の条)

と、湖田の廢止が奏上されるが、

明州言、契勘、廣徳湖下等田畝、緣既已爲田、即無復可爲湖之理、不免私自冒種。：欲乞依舊爲田、令元佃人戸耕種。從之。

(紹興十三年三月二十四日の条)

と、下等の田地だけは固定してしまっている、そのまま継続することを認められる。前に出てきたように、広徳湖の田は上中下の三等に分れていた。越州の鑑湖では、

其後(吳)芾任刑部侍郎、復奏、自開鑑湖溉廢田、一百七十頃、復湖之舊。(同書食貨八水利、隆興元年十一月二十四日の条)と、江衍が立てた石碑外の田一百七十頃が開掘されている。

湖田は政策上廢止されとしても、現実においては早急に無くなるものではない。次章に見るように、官庁・功臣・寺院・宮觀等の名の下に湖田は続いて行われるのである。結局、湖田が他の機能をどれだけ妨げたかは計量しがたいが、その進展が顕著であったことは認めてよいであろう。

次に、湖田と並んで関心を集めたのは、水草による湖の填塞の問題である。その主たる湖は、杭州の西湖と明州の東銭湖である。水草による填塞には、茭草の發生などの自然的原因と、宝慶四明志卷一二に引用する胡槩の劄子に、

東湖植荷、民徼微利。所在皆是、未免妨水。或者乃持荷可養水之說、而不受淤泥。曾不知、水淺則荷盛、水深則荷衰、理之必

然、所易曉者。

と、荷の生育には水が浅くないといけないとあり、荷菱等の栽培による人為的原因とを数えることができる。その中、前者による場合が大半である。

蘇軾によると、西湖では、

及錢氏有國、置療湖兵士千人、日夜開浚。自國初以來、稍廢不治、水涸草生、漸成葑田。

とあって、五代の呉越国錢氏の時に療湖の兵士が千人置かれ、日夜開浚に当たっていたが、宋代に入ってから浚治されず、水少く草生い茂る葑田になっている。そこで、

資政殿學士右諫議大夫知杭州鄭戩爲給事中知并州兼河東路經略安撫緣邊招討使。……既納國後不治、葑土壅塞、爲豪族僧坊所占、湖水益狹。戩發屬縣丁夫數萬闢之。民賴其利。事聞。詔、杭州歲治如戩法。（統資治通鑑長編卷一三七、慶曆二年六月癸未

の条）

と、葑土で壅塞し、豪族僧坊が冒占して、人為的にも湖が狭くなっているのを、知杭州の鄭戩が数万人に及ぶ属県の丁夫を動員して開浚している。その後、

熙寧中、臣通判本州、則湖之葑合、蓋十二三耳。至今纔十六七年之間、遂壅塞其半。父老皆言、十年以來、水淺葑橫、如雲翳空、倏忽便滿、更二十年、無西湖矣。（蘇軾）

と、熙寧年間にはそれほどでもないが、十六七年の間に葑による壅塞が二三割から五割迄に増加している。そこで、

適會錢塘縣尉許敦仁建言西湖可開狀。其略曰、……竊見、吳人種菱、每歲之春、芟除湧漚、寸草不遺、然後下種。若將葑田變爲菱蕩、永無菱草壅塞之患。今乞上件錢米、雇人開湖、候開成湖面、即給與人戶、量出課利、作菱蕩租佃、獲利既厚、歲歲加功。若稍不除治、微生菱葑、即許人割賃。但使人戶常憂割奪、自然盡力、永無後患。……軾尋以敦仁之策、參考衆議、皆謂允當。已一面牒本州、依敦仁擘畫、支上件錢米雇人。仍差掉江船務樓店務兵士共五百人、般載葑草、於四月二十八日興工去訖。（蘇軾）

と、先ず錢米を支給して菱葑の地を開浚した上で、人戸に租佃させて菱蕩に改めさせる、そして少しでも菱葑が生え

たなら別の者と交代させる、というような策をとっている。菱の栽培は第一章で述べたように菱蒔の地に限って認められて居り、

本州公使庫、自來收西湖菱草蕩課利錢四百五十四貫充公使。(蘇軾)

と、四百五十四貫に上る課利錢が公使庫に入っていた。それがこの時に菱蒔の地の全域というように面積が拡大するのである。その境界には、

已指揮本州、候開湖了日、於今來新開界上、立小石塔三五所、相望爲界。亦須至立條約束。(蘇軾)

と、ただの水面と種植許可の部分とを、三五所の小石塔で区切る。更に種植される中では、

湖上種菱人戸、自來鬪割葑地、如田塍狀、以爲疆界。緣此即漸葑合、不可不禁。今來起請、應種菱人戸、只得標插竹木爲四至、不得以鬪葑爲界、如違亦許人割賃。(蘇軾)

と、これまで菱蒔の地に刻みを入れて田のあぜのようにしていたが、それでは菱蒔が再発するので、竹木を挿して標識にする。

南宋に入ると、西湖では先ず撩湖の兵士がおかれている。宋会要輯稿の方域一七水利、紹興十九年八月十一日の条に、知臨安府湯鵬舉言、：紹興九年八月十七日已降指揮、許本府招置廂軍兵士二百人、衣糧依崇節指揮例支破。見管止有四十餘人。今已撥填、俸及元額、蓋造寨屋舟船、每名日添支米二升半錢五十文、專一撩湖、依昨降指揮、不許他役、如違計贓定罪。

と、紹興九年に撩湖の兵士がおかれ、廂軍の兵士二百人をその用に当てる。その後四十余人に減少したが、この十九年に元額の二百人に復している。また同書食貨八水利、乾道五年二月七日の条には、

權發遣臨安府周倬言、今相度欲、增置撩湖軍兵、以百人爲額、專委錢塘縣尉並壕寨官一員、於衙內帶主管看湖、專一管轄軍兵開撩。：從之。

と、再びこの間に減ずるかに見える撩湖の軍士を百人と額をきめて、錢塘県尉と壕寨官一員に管理させている。

西湖には、填塞することの外に、あるいはそれより重大なこととして、湖水の汚染の問題が起っている。前に出て

きたように杭州は飲用水に恵まれず、西湖の水を用いないといけない。それにも拘らず、

今訪問、諸處軍兵、多就湖中飲馬、或洗濯衣服作踐、致令汚濁不便。(宋会要輯稿の方域一七水利、紹興二年四月十六日の条)

と、軍兵が馬に水を飲ませたり、衣服を洗濯したりで、汚濁を来している。また、

上謂宰執曰、…聞近年以來、爲人買撲拘占、作葑田種菱藕之類、沃以糞穢、豈得爲便。(紹興十七年六月一日の条)

と、葑田にしたり菱藕を植えている部分に、肥料として糞穢を投入している。そのため、

可令臨安府、措置禁之。(同条)

と、一切の種植を禁止し、紹興十九年八月十一日の条には、

知臨安府湯鵬舉言、…紹興十七年六月内申明、不許請佃栽種。今來又復栽種填塞、臣已將蓮荷租錢、並除放訖。

と、その後も栽培が行われて填塞の状を来すので、この時蓮荷の租錢も免除され、再び禁止の措置がとられる。この蓮荷栽培の禁止いわゆる人為的原因の除去に当っては、汚染と填塞を防止する意味が兼合わされている。ただしこの措置は全域に適用されるのではない。同書食貨八水利、乾道五年二月七日の条に、

權發遣臨安府周悛言、…仍乞除德壽宮外、自今並不許有力之家、種植菱茭、及因而包占、增疊堤岸。或有違戾、依蘇軾任内申請、以違制論。從之。

と、德壽宮だけには特別の權益として菱茭の種植を認めているのである。

その後の形勢は、乾道九年十一月二十三日の条に、

臨安府言、承御降文字、竊惟、西湖自蘇軾開鑿以後舊額合招撥河兵士二百人、駐於近湖之地。歲輒開撩、不使淤塞。今六飛駐蹕所在、止二十有五人。

と、忽ち撩湖の兵士が二十五人に減少して開浚が進まず、続いて、

況禁戢不嚴、冒佃侵多。故多葑菱蔓延、西南一帶、已成平陸。而濱湖之民、每以葑草圍裹、種植荷花、駸駸不已。若不鋤治、恐數十年之後、西湖遂廢、將如越之鑑湖、不復可復。

と、湖浜の民の冒佃が次第に増加し、葑草で囲裏して蓮荷を種植するので、西南の部分など陸地のようになっている。そして数十年後には越州の鑑湖の二の舞になりかねない状態である。

明州の東錢湖では、乾道五年九月六日の条に、

昨因豪民於湖塘淺岸、漸次包占、種植菱荷、障塞湖水、紹興十八年、雖曾檢舉約束、盡罷請佃、歲久菱根蔓延、滲塞水脉、致妨蓄水。兼塘岸間低塌去處、若不開淘修築、不惟侵失水利、兼恐塘埂相繼摧毀。

と、西湖と同じように、紹興十八年に菱荷の栽培を禁止したのであるが、次第に菱の根がはびこって貯水を妨げている。また宝慶二年、尚書胡榘の劄子（宝慶四明志卷一二）に、

昨程提刑嘗申請、不許民戶種荷。已蒙朝廷行下、盡令屏除。今未十年、荷蕩已占三之一、菱葑因占三之二。

と、その後も栽培が禁止されるが、当時荷蕩が湖全体の三分の一、菱葑が三分の二を占めている。これに対して、

其後本州言、…今欲度量、將所椿錢米、先修堤防。堤防既高、水自瀦蓄。水勢既深、雖菱葑未除、亦不爲害。詔、開東錢湖前旨不行、所椿錢米、令本州修築堤岸。（宋会要輯稿の食貨八水利、乾道五年九月六日の条）

と、東錢湖の開鑿を中止して堤防を増高し、水を貯蓄して菱葑はそのまま害をなさないように計画されたりする。また、

皇子判明州魏王愷言、…今欲開濬、約用錢一十萬貫米一萬碩。詔、於本州見管義倉米內、就撥米一萬碩、提領南庫所支會子五萬貫。（同書食貨六一水利、淳熙三年四月二十六日の条）

と、魏王愷が錢米を支給されて湖の開濬に当たっているが、結局「既復填淤」とか「湖益湮」とか「幾無湖矣」というように填塞しているのである。要するにこの場合でも湖田と同様に、国家権力が開浚に努力しない限り、菱荷の栽培が続ぎ、菱草が発生し、両々相俟って填塞を招いているのである。

三 利益の取得者

禁令下にも湖田が横行し、荷菱の栽培が行われたのは、何れも利益を伴っていたからに他ならない。そこで次にこの湖田の推進者あるいは菱荷の栽培者について考えてみたい。これはすでに玉井氏が豪家や寺観寺をあげて説明されたところであり、更に佐藤氏が「豪民たちの手による湖田化」を指摘されたところであるが、いまそれらを参照しながら少しく敷衍しようと思う。それには先ず形勢豪強人戸・権要之家・有力之家等と称される権力と結合した有力者層の動きが注目される。前に出てきたように西湖では、国初以来豪族僧坊の冒占が見られた。また宋会要輯稿の食貨七水利、皇祐元年正月二十五日の条に、

兩浙轉運司言、知越州餘姚縣謝景初申、當縣陂湖三十二所、並係衆戸植利蔭田、内二十一所、見于圖經。其間有被形勢豪強人戸請射作田納租課後來、遂廢水利去處。雖累有詔敕及赦、令山澤陂湖不得占固、即無明言不得請射營種、及無簿籍拘管、所以官司因循請託、或致受納賂遺、令形勢豪強人戸、請射作田、以起納租稅爲名、收作己業。民田蔭溉之利、其弊不細。

とある。いうところによると、詔敕とか赦に山沢陂湖を独占してはいけないとあるだけで請射してはいけないとはなく、またこれまで帳簿に載せて利用させているわけでもないという事情がある。そこで越州余姚の陂湖では、形勢豪強人戸が役所とかけあい、租税を納入するという名目で請射している。また嘉祐五年七月六日の条に、

羅拯言、昨差往兩浙路、相度均定茶租。窃見、諸處係官湖廣并運河邊田土、多被權要之家請射、及隣近鄉民侵占汚澱、種作成田、或量出租課入官。…如越州鑑湖、…近歲爲貪黷之輩、以權勢干請、假託姓名、占射殆遍。

と、権要の家が請射し、あるいは近隣の郷民が侵占している。殊に鑑湖では、権勢にまかせて指定を請い、姓名を仮託したりして、殆んどが田地になっている。また政和元年三月十四日の条に、

詔、近因陳仲宜等言、諸路湖陂池塘陂澤、緣供贍學費、增收遺利、縱許豪富有力之家、薄諭課利占固、專據其利、馴致貧窶細民、頓失採取蓮荷蒲藕菱芡魚蟹蝦蜆螺蚌之類、不能糊口營生。若非供納厚利於豪戸、則無繇肯放漁採。…

と、湖陂池塘陂沢のあるところ、学費を拮出するために、豪富有力の家に課利を納入してその利を独占させている。がその結果、貧民は厚利を豪戸に納めないと、蓮荷蒲藕菱芡魚蟹蝦蜆螺蚌の類を採取できず、生活の困難を来している。

この態勢はその後も変わらないだけでなく、政和末湖田政策が開始されると、その度合はますます強まる。同書食貨六三農田雜録、宣和三年二月一日の条に、

詔、越州鑑湖明州廣德湖、自措置爲田、下流澶塞、有妨灌溉、致失陷常賦。又請佃人多是親舊權勢之家、廣占頃畝、公肆請求。兩州被害民戶、例多流徙。：

と、鑑湖と広徳湖においては、大抵親旧で權勢のある家が広大な面積を占め、公然と行動している。また紹興二年七月十七日の条に、

樞密院計議官薛徽言、被旨體問得、明州廣德湖田、元分三等、：緣開墾之初、不問肥瘠高仰深封、一等亡租^人。其上中二等、皆權勢之家請佃、下等多是不曾耕種。所得不足輸官、往往抑勒貧民、承受分種、歲久爲害。：

と、広徳湖では三等級に分けた内、上中二等級は皆な權勢の家が耕作するところとなり、残る下等は貧民に強制して割附けている。

南宋に入ると、官庁・功臣・寺院・宮觀等の進出が著しい。先ず紹興五年、鑑湖、広徳湖、湘湖等の処にまだ湖田が存続し、往々にして州県官が頑猾の民の画策を得て、自らの職田に充当している（宋会要輯稿の食貨七農田雜録、同年閏二月四日の条）。また紹興二十九年に選鋒軍都統制の李顯忠が宣賜された鎮江府の田を、これまで能仁寺が耕作していた鑑湖の牌外の田と換え、三十一頃九十三畝一角の面積があった。しかしその後牌外の田を再び湖にするこ
とになり、元通りに鎮江府の田を給与している。何れにせよ能仁寺あるいは李顯忠が一時なりとも湖田の利を得ている（同書食貨六一賜田雜録、隆興二年二月十三日の条）。李顯忠は更に湘湖の田十余頃を百姓汪念三等から献上されている（乾道四年十月二十六日の条）。また伝法寺の僧が許可を得て明州定海県の鳳浦沈審両湖の田八頃を耕作している（同書食貨六一水利、淳熙九年六月二十二日の条）。また明州鄞県の東錢湖で開洩した後の茭葑を堆積して出来た葑地を、資教院の僧が租を収めて耕作している（淳熙十二年正月五日の条）。また慈福宮とか延祥觀が鑑湖の牌外の田を、管莊の利を目論む姦人達によって献じられている。その後この莊田は修内司の下にうつる（嘉泰元年十月四

日の条)。また徐次鐸の水利説によると、

吳公所開湖、纔數年皆復爲田。豐於今、或歲輸所入於官、或爲慈福宮莊田及蕩地、歲輸所入於莊、或爲縣公田及蕩地、歲輸賃直於縣、爲應辦用度錢、或爲告成天長千秋大禹等寺觀、因佃吳給事積土之山、而包佃爲田及蕩地、故湖廢塞殆盡、而水所流行、僅有從橫枝港、可通舟行而已。

とあって、鑑湖では、吳芾が開掘して後、一般人の湖田になり、租を官に納めるばかりでなく、あるいは慈福宮の莊田とか蕩地になって租が莊に入り、あるいは県の公田とか蕩地になって賃直が県に入り、用度を応辦する錢となり、あるいは告成・天長・千秋・大禹等の寺觀が包佃して田とか蕩地にする。そのため湖は見る影もなくほとんど填塞してしまう。玉井氏が「湖田の侵耕者は田を延祥觀の如き権力者に獻入して己はその管莊となつて私を食つた」と指摘された通り、州県官と頑猾の民、李顯忠と汪念三、慈福宮・延祥觀と姦人とは、何れも被寄進と寄進との關係にあるのである。このようなことは南宋に入つての新しい傾向であり、一つには折から湖田政策に反省が起つてゐることも関連するのであらう。

次に菱荷等の場合は、北宋では一般に公開されたが、南宋では栽培の禁止などあって、特別の權益に化す傾向がある。前に出てきたように、西湖で徳壽宮だけが栽培を認可されていた。また宋会要輯稿の食貨八水利、乾道九年十一月二十三日の条に、

其後臨安府守臣言、一切芟除外、西至顯明寺前、北至四聖觀港湖、東至王妃塔、南至山脚、種植菱芡蕩等、並係良馬院主堂と、一切除去して、ただ良馬院主堂が菱芡を栽培する部分だけは、その地域を限つて残そうとしている。しかしながら一般の食指が動くのもまた当然のことであり、同条に、

臨安府言、…況禁戢不嚴、冒佃侵多。故多葑菱蔓延、西南一帶、已成平陸。而濱湖之民、每以葑草圍裹、種植荷花、畧畧未已。と、湖浜の民が禁令を犯して盛んに葑草で囲裹して、荷花を栽培している。

余杭県の南湖では、同書食貨六一水利、紹熙五年九月二十七日の条に、

司農卿兼知臨安府蔡戡兩浙轉運判官黃勰言、…紹興初、南湖爲慈生馬監、馬不蕃息、監遂墜廢。而湖有蘆葦莢莢鴉魚之利、至今監據其利。凡民間下湖採取、必納錢買牌、違者有禁。今來馬監既已久廢、則西湖合還本縣。

と、余杭県の南湖において、紹興の初め慈生馬監がおかれ、馬は蕃息しないで失敗に終ったが、湖の蘆葦莢莢鴉魚の利を占有している。民衆がそれを得ようとすれば、牌を買わないといけない。

明州の東錢湖では、同書食貨八水利、乾道五年九月六日の条に、

權知明州張津言、轄下東錢湖、…昨因豪民於湖塘淺岸、漸次包占、種植菱荷、障塞湖水、紹興十八年、雖曾檢舉約束、盡罷請佃、歲久菱根蔓延、滲塞水脉、致妨蓄水。

と、豪民が浅岸を占有して菱荷を栽培し、貯水を妨げている。また同条に、

其後本州言、…自前雖時復野生菱草、諸鄉百姓、至二三月間、便採割貨賣、飼食耕牛。近年因兩寨水軍牧馬、盡籠有之、刈割失時、以致根蔓、積爲厚封。

と、諸郷の百姓が野生する菱草を收穫して売却したり、耕牛の飼料に当てていたが、その後水軍の兩寨が牧馬してこれを独占している。

さて、豪家、形勢豪強人戸等々とあげてみても、その具体的な姿はなかなか掴みにくい。従つて、直ちに對置できないのであるが、次のような記述が見える。宋会要輯稿の食貨七水利、紹興九年五月二十四日の条に、

權發遣明州周綱言、嘗考、明州城西十二里、有湖名廣德、…自政和八年守臣樓昇請廢爲田、召人請佃、得租米一万九千餘碩。至紹興七年、守臣仇愈又乞、令見種之人、不輸田主、徑納官租、增爲四万五千餘碩。…

と、紹興七年に知明州仇愈が広徳湖において見種の人が租を田主に輸納しないで、直接に官庁へ納めるように措置し、その結果租額が一万九千余石から四万五千余石に増加する。これまで田主はその差額二万六千石を収得していたのである。ここに田主と見種の人という構成が出ている。後者は直接生産者と見做しうるであろう。宋史卷三九九仇愈伝を開くと、

改浙東宣撫使知明州、以挫豪強獎善良爲理、吏受賕雖一錢不貸、姦猾斂迹。州權兵火既燬、念斥厨錢助其費、買田行鄉飲酒禮。歲饑、發官儲損其直、民無死徙。

とあつて、兵火の後、飢饉に見舞われた際にとられた権宜の措置と推測される。

それでは湖の周辺の民衆は湖に対してどのように反応しているのであらうか。前出の宋会要輯稿の食貨七水利、嘉祐五年七月六日の条には、

羅拯言、：窃見、諸處係官湖廣并運河邊田土、多被權要之家請射、及鄰近鄉民侵占汚濫、種作成田、或量出租課入官。

と、権要の家が請射しているのと共に、隣近の郷民も侵占して田地にしている。また同書食貨八水利、隆興元年十一月二十四日の条に、

知紹興府吳市言、鑑湖之廣、：歲月寢遠、濬治不時、日以堙廢。瀕湖之民、侵耕爲田。熙寧間、盜而田者、九百餘頃。

と、鑑湖において湖瀕の民が無断で耕作している。前出の乾道九年十一月二十三日の条には、

臨安府言、承御降文字、竊惟西湖：濱湖之民、每以葑草圍裹、種植荷花、駁駁未已。

と、西湖において湖浜の民が荷花の種植を行っている。どの例も私の利益を追求して居り、湖水の維持に支障を来すものばかりである。文書の性格にもよるであらうが、これらの中に湖水の利用に関する協力関係は何うことが困難である。佐藤氏が湘湖に見出されたような郷村の動きについても同様のことがいえる。